

第三者評価結果報告書

《総括》

対象事業所名	くるみ学園児童
経営主体(法人等)	社会福祉法人ル・プリ
対象サービス	障害児入所施設
事業所住所等	横浜市旭区金が谷 550
設立年月日	昭和 42 年 4 月 1 日
評価機関名	株式会社 R-CORPORATION
評価項目	横浜市版

《総合評価》

※漢字につきましては常用漢字の採用および、横浜市指定の変換で表示させていただいています。

【くるみ学園の概要・立地】

●社会福祉法人ル・プリ くるみ会は、1966（昭和41年）年10月8日に設立され、53年目を迎える歴史ある施設です。「ル・プリ」（LE PLI）（以下、法人）は、横浜市の各地域での実践を通じて成果を出してきた「くるみ会」、「試行会」、「杜の会」の3法人が統合されてスタートした法人であり、現在は各々「事業本部」として従来の活動をすると共に、3事業本部としての総合力を発揮すべく体制を固めつつあります。「くるみ会事業本部」の知的障害児入所施設くるみ学園児童は、知的障害児施設として昭和42年4月に開設され、社会福祉法人ル・プリ くるみ会事業本部として、知的障害児入所施設（くるみ学園児童）、生活介護施設入所施設（くるみ学園成人）、児童養護施設（ポート金が谷）、生活介護（ひかりの園）、生活介護・施設入所支援（ホルツハウゼ）、障害福祉サービス事業所（横浜光センター）、共同生活介護（くるみホーム）、パン工房（くるみの木）を展開しています。職員一同、「思いやりの関係を体現する場」として、くるみ会に集うすべての一人ひとりを大事にし、旭区金が谷にくるみ学園、ポート金が谷、ホルツハウゼが「思いやりの関係」を構築し、社会的自立に向けて集結しています。

●くるみ学園は、相鉄線二俣川駅からバスで12分、ニュータウン第7バス停から徒歩5分のところに位置しています。金が谷は、中原街道と保土ヶ谷バイパス（16号線）の交差点に近く、相鉄線からはやや離れてはいますが車でのアクセスが良い立地です。周辺は16号線に沿った丘陵地帯で、相鉄企業が住宅地として開発した1戸建てのニュータウンが展開され、相鉄バスとの提携も良好で横浜方面への通勤者のベッドタウンとして定着しています。今回の第三者評価はくるみ会発祥の原点である障害児入所施設の評価を実施します。

【知的障害児入所施設くるみ学園児童の支援方針】

●知的障害児入所施設くるみ学園児童の支援の根幹は、「1.発達の保障」と「2.自己決定、自己選択」です。
1. 発達の保障については、糸賀一雄氏が提唱した『どのように重度の障害を有していても、発達成長することができ、それはその人固有の権利である』の観点を基本の考えとし、乳児期から成人期までの段階的なライフステージに即応した支援を進めています。特に、青年期以降のステージを規定する期間と言われている幼児期から学齢期前半を与える知的障害児入所施設くるみ学園児童の支援は重要と認識し、支援に当たっています。

2. 自己決定、自己選択については、知的障害児の場合には、現実の場面では相対的概念として存在します。例えば、暑い夏に厚手の洋服を身に付ける、好きな食べ物を選ぶ場面でその人に糖尿病がある場合等、選択肢は狭まることになります。このように、自己決定あるいは自己選択の尊重とは非常に重みのある現実が存在しています。くるみ学園として、くるみ学園で生活する子どもたちについて発達成長することはその人固有の権利であり、相対的な自己決定、自己選択が保障されるよう支援しています。

《優れている点》

1. 【小ユニット制による支援】

●知的障害児入所施設くるみ学園児童は、障害児入所施設と障害者支援施設を総称していますが、今回の評価は障害児入所施設くるみ学園です。障害児入所施設くるみ学園では、定員 20 名を 4 つのユニットに男女 5 名ずつの 4 つの生活グループ（ユニット）に分けて支援を行っています。小ユニット制のメリットは、少人数での生活を提供することで家庭に近い環境が保障され、子どもたちが安心して生活できるようユニットの中で生活が営まれるよう配慮されています。また、小ユニット制での生活は知的障害の子どもたちにはわかりやすく、見通しを持った暮らしを提供して行くことができ、子どもが誰をモデルにして暮らして行けば良いかの手本が同じユニット内にあり、子どもたち同士の育ち合いも可能としています。職員は、子どもたちの主体性を育み、自発的に取り組む姿を支援しています。

2. 【「動線表」を活用した支援】

●知的障害児入所施設くるみ学園児童では、1 日の生活の流れを明確にした「動線表」を活用しています。子どもの 1 日の食事時間を一定にし、睡眠のリズムを確立し、排泄の習慣を身につけられるよう、毎日安定した生活を繰り返すことができるよう「動線表」に基づいた生活を支援しています。また、職員の勤務体制を考慮し、どの職員が支援を行っても子どもたちの生活リズムが保障されるようにしています。「動線表」は、毎日の子どもの生活において「いつ、どの場所で、どのような活動に取り組みながら暮らしを進めていくか」の指針となり、職員も 1 日の暮らしの中で「今は何をやる時間なのか」を意識し、働きかけることで「今取り組むこと」を子どもに伝え、その中で、子どもたちが「自分でできること、自分で取り組もうとする力」を身に付けていけるよう支援しています

3. 【集団活動での支援の取り組み】

●知的障害児入所施設くるみ学園児童では「グループダイナミクス」を取り入れ、集団力動（集団によって働く力）を活用し、子ども同士が互いに成長できるよう支援を続けています。職員は集団の存在を大切にし、集団そのものへの理解を深めて援助にあたり、集団内に発生する個々の心理や行動、相互作用を解明して支援に取り組み、1 人では楽しめないことも集団であることにより可能になるよう、交流を通じて子ども一人ひとりに職員や他児との関係に気付きを生み、その関係を保ったり、互いの意見を調整する等、子ども本来の力を生かして成長できるよう支援に努めています。

《さらなる期待がされる点》

1. 【地域支援活動について】

●地域に対する理解促進のために、町内会と連携を図り、地域交流会では地域の方の参加を促し自治会やコンビニエンスストア等にポスターを掲載して知らせています。施設内のホールは地域の方々へ貸し出しできる旨をアナウンスし、地域の行事ではテント、椅子等の備品を貸し出す等、交流を図っています。子どもたちは子ども会に加入して交流を図り、近隣小・中学校を通じて近隣との交流に努めています。施設の行事、地域の行事での行き来以上に、地域と協力して計画的な交流については施設の性格上限界があることは否めません。しかし、知的障害児入所施設くるみ学園は地域の重要な福祉資源であり、その認識、浸透性を高めていくことは求められます。特に、在宅の障害児・者等に向けた積極的な療育支援の情報提供や、アドバイスの取り組み、また、重度の知的障害に止まらず、軽度の方も相談できずに家庭で悩んでいるケースは多いと思われれます。単なる子どもの発達の遅れでも家庭で悩み、特に自ら相談すべきか、どこに相談できるのかを悩んでいることも多いと聞き及びます。地域で苦慮している方が気軽に足を向け、相談や気になることの解決策が見える施設、親身な各専門職の職員が在籍している施設、くるみ会を利用する方・地域の福祉拠点として、ソフト面についてもPRし、児童発達支援も対応できるシンクタンクの存在として、さらなる地域支援活動が展開されることを期待しています。